

第二次国会仮議事堂の意匠，平面計画 ならびに小屋組について

—第一次仮議事堂との比較考察—

堀 内 正 昭

Design, Floor Planning, and Assembly Hall Roof Truss of the Second Provisional Diet Building: A Comparison of the First Provisional Diet Building and the Second Provisional Diet Building

Masaaki Horiuchi

Abstract

The Japanese Provisional Diet Buildings were used for over 46 years until 1936 when the present Diet Building was completed. The Provisional Diet Buildings were built four times, in 1890, 1891, 1894, and 1925 and they were all made of wood.

This paper focusses on the Second Provisional Diet Building (1891-1925). Using the extant plans, related documents, newspaper articles and pictures, the author examined to deduce what the Second Provisional Diet Building inherited from the First Provisional Diet Building (1890-1891) and what was newly adopted.

The results obtained are as follows.

The installation of brick firewalls in the Second was a priority because the First, which did not have them, burnt down only 2 months after completion in 1890.

The same style of German roof frame as the First building was used for the roof truss of the Second. The wide attic space provided by the German roof frame improved lighting to the assembly room. The scale of the assembly hall of both buildings was the same. This may be because German architects who had experience working on the first building project were also involved in the second project.

There was no tower in the central part of the First building, though it had been included in the plans. The idea was realized in the Second.

The Second was larger than the First, but in both buildings, the location and scale of the octagonal front door hall, the oblong hall and the assembly hall were identical. Also the location of the Emperor's temporary space on the 2nd floor, the terraced arrangements of meeting seats, and the direction of the meeting seats facing the chairman's seat were all unchanged.

Thus the Second building inherited many elements from the First, but the glass installed on the renewed coffered ceiling of the assembly room improved the lighting and the acoustics, many rooms were expanded as required, and the view of the assembly seats was improved by making the floor inclined.

Key words: Diet Building (議事堂), roof truss (小屋組), assembly hall (議場), Yorinaka Tsumaki (妻木頼黄)

はじめに

筆者はこれまでわが国の国会仮議事堂に関して、その初代（第一次）の建物と広島において帝国議会開催のために建設された建物を対象に、それぞれ意匠、平面計画、小屋組等の考察を行った¹⁾。本稿では第二次国会仮議事堂を扱う²⁾（以下第二次、あるいは第二次仮議事堂と略す）。

仮議事堂とは、恒久的な議事堂が完成するまでの代役の建物という意味である。仮議事堂時代は、現在の国会議事堂が竣工した昭和 11（1936）年まで 46 年間続き、その間に計 4 棟が建てられた。以下、建設順に紹介する³⁾。

- ・第一次仮議事堂：明治 21（1888）年 6 月着工～明治 23（1890）年 11 月竣工，明治 24 年 1 月焼失。
- ・第二次仮議事堂：明治 24（1891）年 4 月着工～同年 10 月竣工，大正 14（1925）年 9 月焼失。
- ・広島臨時仮議事堂：明治 27（1894）年 9 月着工～同年 10 月竣工
- ・第三次仮議事堂：大正 14（1925）年 9 月着工～同年 12 月竣工，昭和 11（1936）年 5 月開会の第 69 回議会まで使用。

このうち広島臨時仮議事堂は、日清戦争の勃発（明治 27 年 8 月）で大本営が広島に移り、当地にて帝国議会（第 7 回議会）を召集するために建てられた。その後、建物は広島陸軍予備病院第四分院，第五師団司令部庁舎，広島陸軍地方幼年学校仮校舎などに使われ，明治 31（1898）年に取り壊された⁴⁾。仮議事堂時代の存続期間としては，第二次のものが最長の 34 年となる。

竣工後 2 ヶ月足らずで焼失した第一次の後継として急ぎ再建された第二次仮議事堂は，長きにわたって建て替えられずに使用されてきた。それは，議事堂としての一定の水準を維持してきた証とも言える。そこで本稿では，第二次仮議事堂の外観をはじめ，平面計画，議場空間を造った小屋組技法等について考察し，第一次の何が継承され，どのような工夫が新たになされたのかを明らかにする⁵⁾。

1. 第二次仮議事堂の建築概要

第二次仮議事堂は明治 24（1891）年 4 月 28 日に着工し，6 ヶ月の工期で 10 月 30 日に竣工した。場所は日比谷公園の南西方向に面した街区で，現在経済産業省，日本郵政等の建物が立つ。例えば，明治 44（1911）年の地図に，第二次仮議事堂の建物の輪郭が描かれている（図 1）。同敷地の南北軸はやや右に振れ，敷地の東側に建物への出入り口がある。

第二次仮議事堂はその後，明治 39（1906）年から同 42（1909）年にかけて大掛かりな修繕を行っている。まず竣工当初の建築概要から説明する。

建物は木造 2 階建てで（図 2），建物中央に正面玄関（東側）を，正面向かって右手（北側）に貴族院の，左手（南側）に衆議院の議場をそれぞれ配し，専用の玄関口を設ける。

建物中央部にスロープのある車寄せが付く。車寄

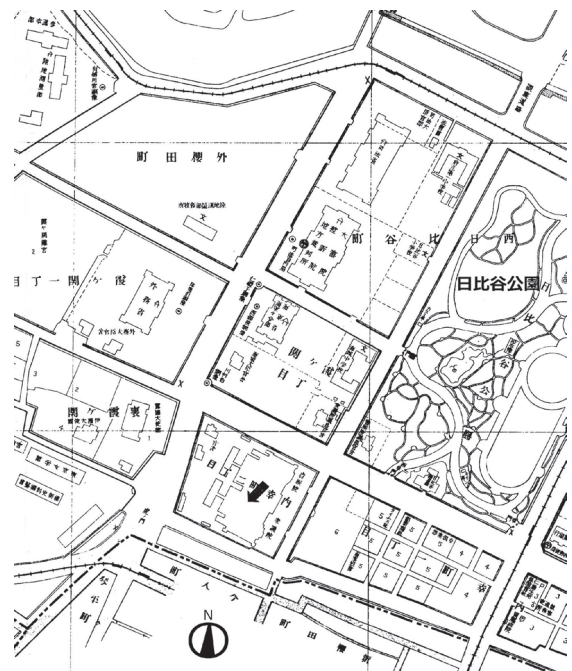


図 1 第二次仮議事堂の配置図（矢印が仮議事堂）



図2 第二次仮議事堂正面全景



図3 炎上する第二次仮議事堂：修繕工事中の大正14（1925）年9月18日に、失火から焼失。



図4 第二次仮議事堂：明治41（1908）年度の修繕後の写真。妻側の意匠は変わっていないと考えられる。

せの正面に2本一組の角柱を計4つ並べ、その上をバルコニーとする。この正面玄関部の頂部の妻面上部には、さらに小さな切妻が張り出してアクセントを添える。貴衆両院の玄関口にはスロープはないが、中央部と同様の造りとし、両院の議場上に大きな切妻造りの屋根を架ける。これらの屋根に比較すれば、中央部に立ち上がる塔屋の規模は小さいが、屋根の周囲に切妻破風の飾りが付く。

建物の両端部は他の棟より張り出し、中央部の塔屋と同様の屋根飾りを持つ。両端部は3階建てであるが、それ以外はほぼ総2階で矩形の窓が規則的に設けられ、両議場上の屋根の妻側ならびに側面に矩形の連続窓が並ぶ。このように、第二次仮議事堂の建物は間口約140mの長大なファサードを誇り、中央部、両院議場部、そして両翼部の計5ヵ所に設置された屋根もしくは塔屋により起伏に富んだ外観を見せる。

外壁は、斜材あるいは×型に組んだ構造軸組を意匠として露にした真壁造りである。炎上する第二次仮議事堂の写真（図3）には斜材が支柱とともに残っていることから、斜材は化粧材ではなく、構造材として機能していたことがわかる。

各玄関口の切妻破風には唐草の装飾模様があしらわれ、両議場の大屋根の妻側には縦板が張られている（図4）。この縦板の下端には丸みを付けた加工がなされている。屋根葺き材は両院議場以外の下

屋周りが棧瓦であるが、写真（図2）では両院議場の屋根の葺き材は不明である。ただ屋根面の色に違いがあり、下屋よりも両院議場のそれの方が濃いため、葺き材を異にしていたと推測する。

次に、主要諸室を紹介する（図5、6）。1階中央玄関を入ると八角形の玄関ホールがあり、その左右（南北方向）の横長のホールから各部属室（第一部から第四部と記載）に出入りする。このホールの先には整衣所を挟んで貴衆両院の議場が配される。両議場のうち、貴族院には玉座があり、建物の両端部には議長室、書記官長室などが設置される。また、玄関ホールの奥（西）には応接所、両院協議室などが、議事堂本体から離れた西側の2ヵ所に会食室がある。

2階へは、玄関ホールに設けられた二股の階段を上り、踊り場を経て行く。階段室の周囲には1階と同じく横長のホールがあり、外国貴賓室、各部属室（第七部から第九部と記載）に至る。1階の両院協議室の上は便殿で、その左右に大臣室、皇族室等がある。また、両院議場周りには各部属室（第五部、第六部）、傍聴人控所、特別委員室等が、本館背後に常任委員室等があり、1階会食室の上は談話室である。

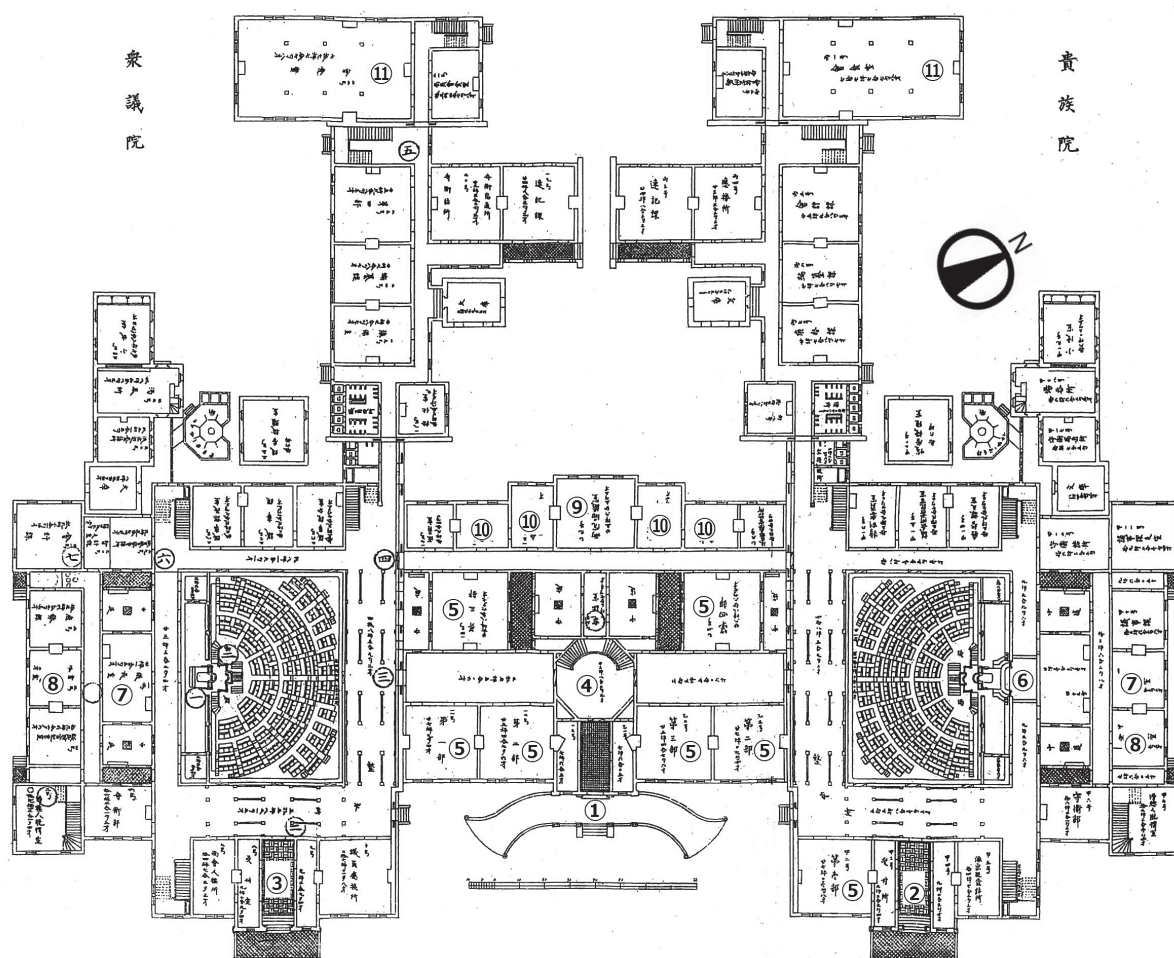


図5 第二次仮議事堂・1階平面図：①中央玄関、②玄関（貴族院）、③玄関（衆議院）、④玄関ホール、⑤各部属室、⑥玉座、⑦議長室、⑧書記官長室、⑨両院協議室、⑩応接所、⑪会食室

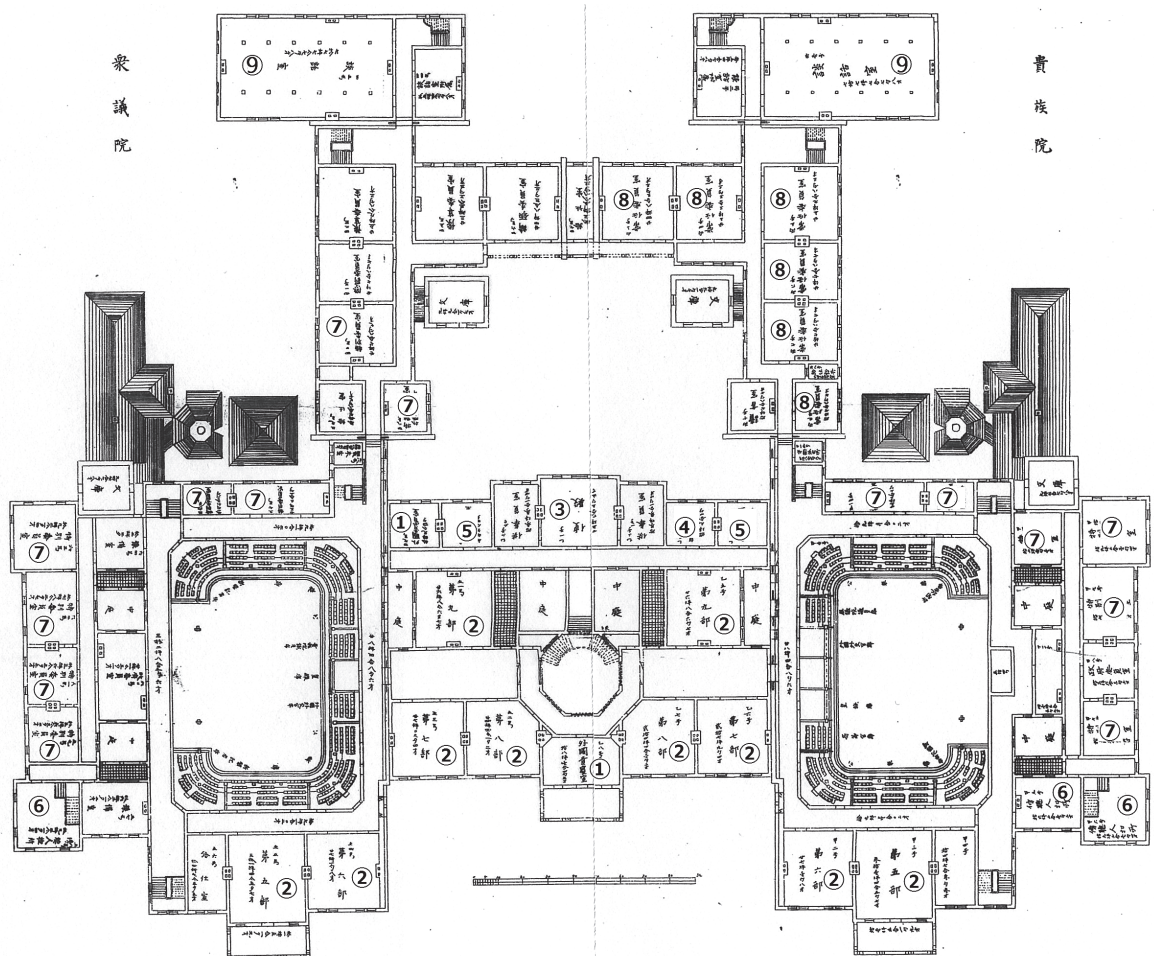


図6 第二次仮議事堂・2階平面図：①外国貴賓室，②各部属室，③便殿，④皇族室，⑤大臣室，⑥傍聴人控所，⑦特別委員室，⑧常任委員室，⑨談話室

2. 第二次仮議事堂の修繕工事

修繕工事は、建物の竣工後15年を経過したときに行われている。修繕工事後の平面図が図7で、『帝国議会議事堂建築報告書』に以下の記載がある⁶⁾。

然れ共本建物は火災後早急の建築に係れるものにして、其の後年々腐朽破損の箇所を増加し来れるを以て、之が大修繕工事は時の司法技師山下啓次郎を主任とし明治三十九年度より同四十一年度に亘りて施行せられたり。この時規模の拡大、両院玄関の模様替等ありて本建物は其の外観に多少の変化を生じたり。

同工事について『大蔵省臨時建築部年報』⁷⁾に詳細な報告がなされている。まず明治39

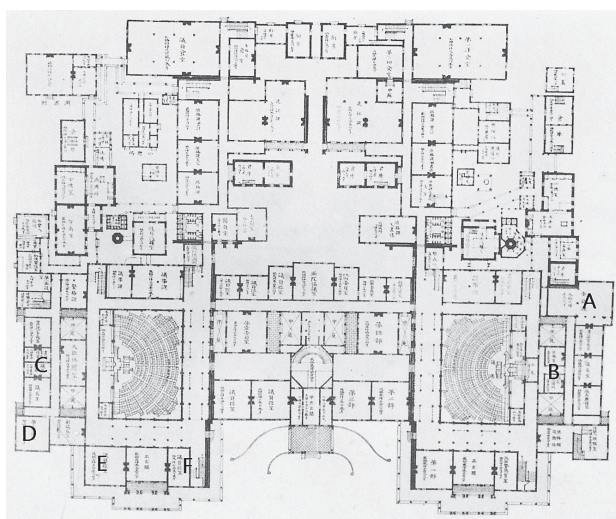


図7 修繕工事後の1階平面図

(1906) 年度において「施行セシ工事ハ本館建物背面ニシテ総建坪ノ約五分ノ一即チ四百五十坪余ナリ工事ノ内容ハ専ラ腐朽ノ箇所ヲ修繕シ構造上必要ノ部分ヲ補足シ又一部ヲ改造シ外觀ノ容姿等ニ至リテハ元形ヲ変セサルコトセリ」⁸⁾という。

明治 39 年度は主に本館以外が対象で、建物の外観の改変を伴うような工事ではなかった。内容を以下に要約する。

- ・本館の土台と床下は大半が腐朽しているので、新材で補修する。
- ・束石は花崗岩に取替え、土間床全体をコンクリートの三和土^{たたき}とし、床下換気口を増設する。
- ・室内の使い方を改善するために、二階床下の梁を変更あるいは増加して、支柱を撤去する。
- ・内部壁はすべて白漆喰で塗り直す。
- ・屋根葺きは根底から修繕する。
- ・暖炉は地震への対処から廃止したが復旧する。
- ・両院会食堂の腰壁(羽目板)にペンキを塗り、その上の壁紙を変える。寄木張りを更新する。
- ・貴族院の委員室と談話室等に絨毯を敷き詰め、貴族院の廊下と事務室、衆議院のすべての部屋はイギリス製のリノリュームを敷く。
- ・天井の塗装が剥落しているので、線形を施した木製に変更しペンキ塗りとする。

次に明治 40 (1907) 年度においては、「施行セシハ建物中央部ニ属シ両院議場ヲ限界トシ総建坪ノ約二分ノ一即チ二百七十坪余ナリ工事ノ内容ハ前年度ト殆ト同一ナルモ(略)外觀ノ容姿ニ於テニ異ナル補修工事ヲ為シタルノ差アルノミ其異ナル点ハ左ノ如シ」⁹⁾として、以下の項目が列挙される(下線筆者)。

- ①両院議場議長席ノ左右荷持柱ヲ除去シ之ニ代フルニ迫持構造トシ以テ完全ト宏壮トヲ期セリ
- ②中央玄関御車寄ハ狹隘ニシテ不便ヲ感スルコト数々ナリシヲ以テ元形ニ倣ヒ六尺通り拡張セリ
- ③両院議員昇降口及其両翼ニ幅約一間五分延長二十一間余ノ「プラットホーム」ヲ設ケ土間ハ全部「コンクリート」叩キ洗ヒ出シト為シ(略)屋根ハ亜鉛鍍鉄板ノ瓦棒葺ト為シ(略)昇降口ノ間ニ在リテハ在来ノモノ狹隘ニシテ交通甚不便ナルヲ以テ左右間仕切ヲ除去シ大広間トシ

①について、議場内の写真を探したところ、『目で見える議会政治百年史』に、第 20 回帝国議会の様子を伝える一場面と(図 8)、「戦時議会記念絵葉書」(図 9)が掲載されていた¹⁰⁾。

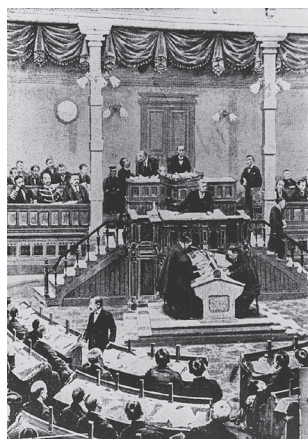


図 8 第 20 回帝国議会・衆議院議場

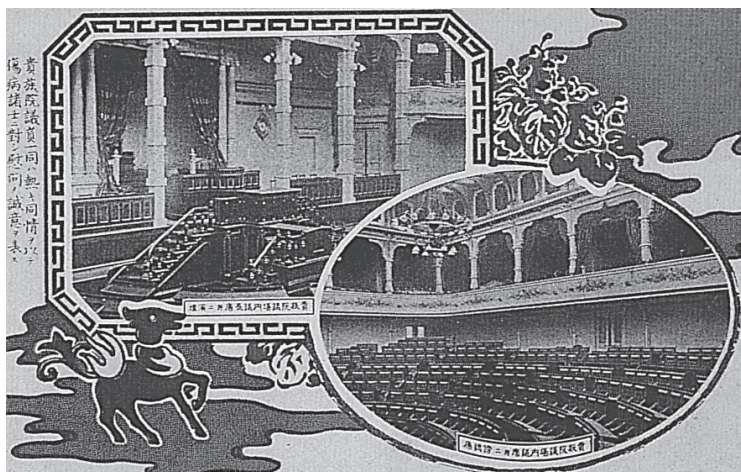


図 9 戦時議会記念絵葉書・貴族院議場

第20回帝国議会は明治37(1904)年3月に、戦時議会は日露戦争中(明治37年2月から翌38年9月)に召集された。したがって双方の図版は修繕前のもので、議長席の左右近くに支柱が立ち、これらが引用文中の荷持柱である。修繕後の議長席周辺(図10)と比較すると、この左右の支柱は撤去されるとともに水平材が引き上げられ、支柱と水平材との結合部にアーチ状の三角小間(引用文中の^{せりもち}迫持構造)が付け加えられたことがわかる。修繕後は、議場内ひな壇(大臣席など)への視界が格段に広がったのである。

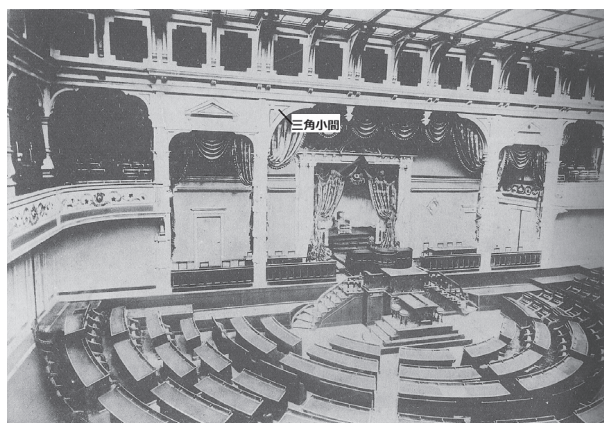


図10 第二次仮議事堂・貴族院議場(修繕工事後)

②については、中央玄関の車寄せの奥行は修繕前より広がっている(図11, 12)。引用の記載によれば6尺広げたことになる。

③については、両院玄関口の車寄せの左右に下屋(引用ではブラットホーム)を取り付け、その幅が1間5分(6.05尺, 1833mm)、長さが21間(126尺, 38182mm)余という。写真(図4)から、下屋の直下が洗出し仕上げかどうかまではわからないが、屋根は亜鉛鉄板の瓦棒葺きであることが判別できる。また両院玄関口の受付所をなくして、正面の3ヵ所から出入りできるように拡張していることも確認できる(図12)。

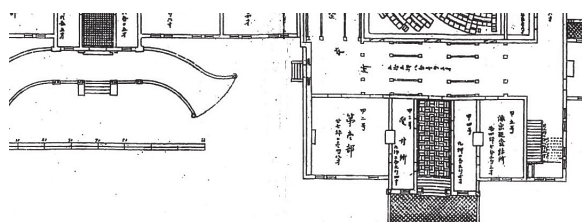


図11 第二次仮議事堂・中央玄関車寄せ周辺
(修繕工事前: 図5の右下部分を拡大)



図12 第二次仮議事堂・中央玄関車寄せ周辺
(修繕工事後: 図7の右下部分を拡大)

以上のほか、明治40年度はとくに便殿と玉座の内装の化粧直しを行っている。

なお修繕に関して、新聞記事に別の記載があるので、その部分のみを引用する(下線筆者)。

改修前に比し相違を来したる箇所は(略)皇族、外国人、議員、婦人各傍聴席を除くの外一般人士の傍聴席の間にありたる間切壁を取除き新聞記者席を傍聴席前面全部に取広げたる¹¹⁾

傍聴席については、『世界の議事堂』¹²⁾に修繕後のものが掲載されている(図13)。修繕前の2階平面図の傍聴席は2つの間仕切り壁で3区分されていたが(図14の①, ②), それらは修繕後には撤去されている。

修繕工事の最終である明治41(1908)年度は、「本年度ニ於テ施行セシ区域ハ両院議員整衣所ヲ限界トシ建物左右翼ニ亘ル部分ニシテ総建坪ノ五分ノ一約三百五十坪ナリ」¹³⁾という。

文中の整衣所とは、両院議場の南ならびに東側に隣接する所で、両翼部を主とした工事となる。主な修繕箇所をまとめる。

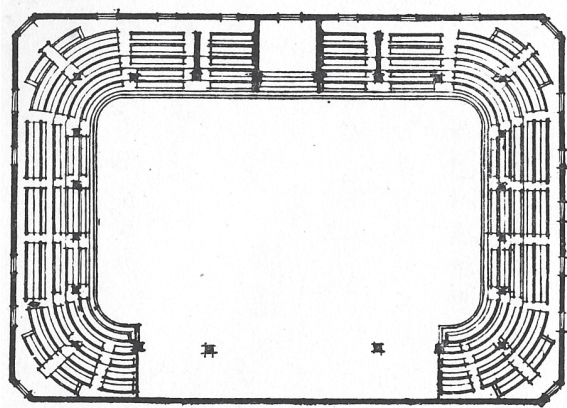


図 13 衆議院傍聴席（修繕工事後）

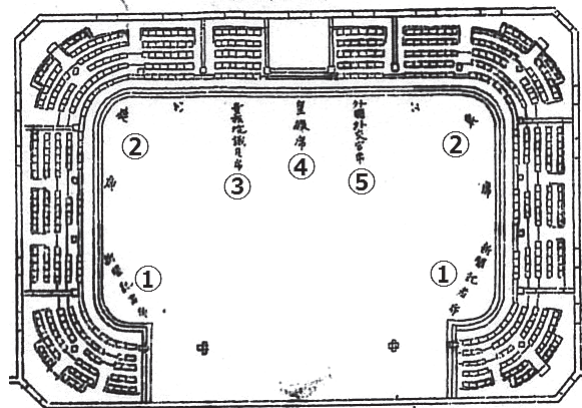


図 14 衆議院傍聴席（修繕工事前：図 6 の左下を拡大）
①新聞記者席，②公聴席，③貴族院議員席，
④皇族席，⑤外国外交官席

- ・ 貴族院の委員課室（図 7 の A）を拡張し暖炉を増設する。
- ・ 同院の議長付属室に T 字形廊下を新設して議場への出入りを便利にする（図 7 の B）。
- ・ 衆議院の議長室に間仕切りを入れ，議長ならびに書記官長の執務室に改造する（図 7 の C）。
- ・ 同院の傍聴人通行階段を撤去し貴賓応接室とする。階段を移設した部屋に間仕切りを入れて，議員応接室とする。

図 7 に記入した A～C 以外は，図面記載の名称とは異なるため，場所は正確に特定できないが，同図の D, E, F が修繕前の図面とは異なる。このほか年報では，両院の議長室，書記官長室等の壁と床が更新されている。

3. 設計者について

第二次仮議事堂は，「内務技師吉井茂則及独逸人建築家オスカル・チーツェ等の設計」によるとされ¹⁴⁾，2 名以上の設計者がいたことになる。

そもそもわが国の国会議事堂の設計は，ドイツのエンデ&ベックマン建築事務所が請負い，同所員のパウル・ケーラー（1888 年没）が担当した。仮議事堂案もケーラーが手掛けたが，病気のため同じ所員のアドルフ・シュテークミュラー（生没年不詳）が引継ぎ，内務技師の吉井茂則（1857～1930）とともにその任に当たった¹⁵⁾。

したがって，吉井茂則は第一次に続き第二次仮議事堂に係ることになる。吉井とともに併記されたチーツェは Ottokar Tietze と綴るので，以下カタカナ表記ではオットカー・チーツェとする。チーツェ（1858～1911）はドイツ人建築技官で，わが国の官庁集中計画に携わったとされる人物である¹⁶⁾。明治 20（1887）年 5 月に来日し，1892 年 1 月に離日している。チーツェは司法省庁舎（現法務省旧本館，工期 1888～1895）の工事担当者として来日したが，途中から担当をはずれている。在日中は仮議事堂のほかに，大臣青木子爵のための付属屋付き別荘，ドイツ公使館の増築，ドイツ東洋文化研究協会の改築，横浜の生糸倉庫の工事等に携わったとされる。

ところで，第二次仮議事堂の設計者として，東京日日新聞ならびに『世界の議事堂』にはそれぞれ次の記載がある（下線筆者）。

麴町区内幸町二丁目の焼失跡へ新築すべき貴衆両院は吉井内務技師が製図の任に当り、古市土木局長、妻木技師の設計にて予算金額を二十五万円と定め、去る五日に内閣へ提出せり¹⁷⁾

建築担当技師は前建築に関係した吉井茂則の外妻木頼黄及独逸人オスカル・チーツェ等の人々であつた。¹⁸⁾

後者の引用元である『世界の議事堂』を著した大熊喜邦(1877～1952)は、明治40(1907)年大蔵省臨時建築部に入り、以後多くの官庁建築を手掛け、現国会議事堂の完成に携わっている¹⁹⁾。そもそも大蔵省へは妻木頼黄の勧めで入省しており、議事堂の歴史と内実に精通した人物である。そこで以下、妻木の履歴を紹介する。

^{つま き よりなか}妻木頼黄は安政6(1859)年、江戸の旗本(千石)の家に生まれ、15歳頃から英語を学び始め、明治9(1876)年に渡米する²⁰⁾。一旦帰国して、明治11(1878)年に工部大学校造家学科に入学するが、同校を中退して明治15年にニューヨーク州コーネル大学建築学科に編入する。明治17(1884)年に同大学を卒業して、翌明治18年に帰国する。帰国後は東京府技師となり、明治19(1886)年内閣に臨時建築局が新設されるや同局の技師を兼任している。臨時建築局の目的は、大審院、司法省、国会議事堂の建設を含んだ官庁集中計画を実現することで、そのためにドイツ人建築家エンデとベックマンが招聘される。妻木はこの一大計画の準備のために、明治19年に渡独して、ベルリンのエンデ&ベックマン建築事務所にて実務を経験するとともに、当地にてわが国の国会議事堂案作成に従事している。明治21(1888)年の帰国後は大審院(東京裁判所)の工事監督をし、翌明治22年に東京府庁舎を設計する。そして先述したように、明治27(1894)年、広島にて臨時帝国議會を召集することとなり、その仮議事堂の設計が妻木に託された。

妻木頼黄が第二次仮議事堂に実質的にどの程度係ったのかは明らかではない。しかし、妻木は最初の国会議事堂案に従事し、広島臨時仮議事堂を設計したことから、資料によってはその名が明記されない場合があるが、第二次仮議事堂の設計に参画していた可能性は十分にある。

4. 第一次仮議事堂との比較

4-1 外観

第二次仮議事堂の外観における第一次との目立った相違は、正面中央に塔屋を付けたこと、貴衆両院議場前に新たに玄関口を設けたことである(図2, 15)。さらに建物両端に3階建ての増築を行ったことで偶部が強調され、間口方向の長大なファサードを引き締めている。このように第二次仮議事堂

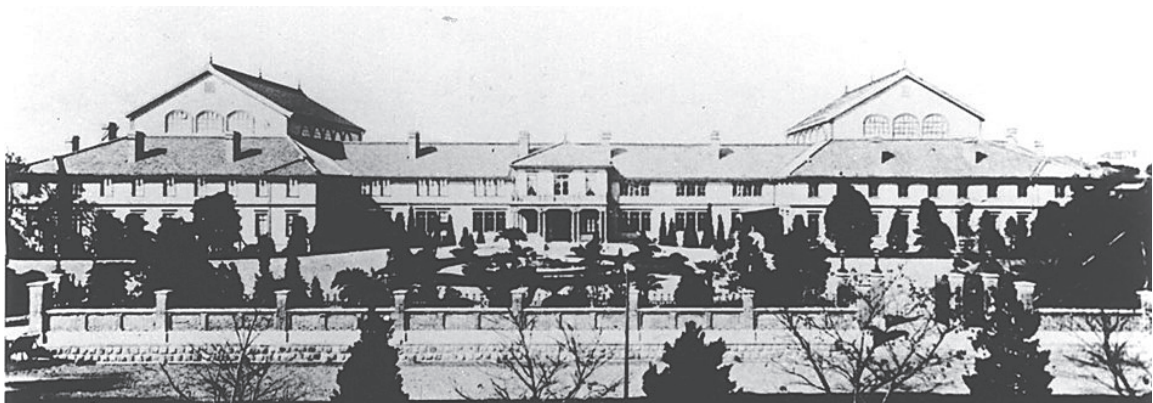


図15 第一次仮議事堂全景：第一次では中央に塔はないが、設計段階では塔が予定されていた。

では、大小計5つの屋根が立ち上がるとともに3つの玄関口が張り出して、垂直方向には高低の、水平方向には凹凸の出入りのある構成となっている。

次に外装については、第一次が一貫して下見板張りの仕上げであったのに対して、第二次では木組の意匠が多用された真壁造りで、第一次以上に修飾されている。開口部については、第一次における議場の大屋根に穿たれた窓がアーチ形であったのに対して、第二次ではすべての開口部に矩形窓を採用している。

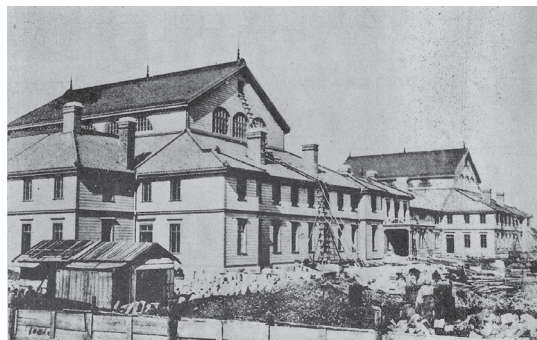


図16 第一次仮議事堂外観

両者には確かに相違点が多いが、玄関口の意匠についてはどちらも2本一組の柱が4本立ち並び、車寄せの上はバルコニーになっている点は同一である。

ところで、屋根葺き材について、筆者は第一次仮議事堂の議場の屋根は天然スレート葺きあるいはアスファルト・ルーフィング、下屋周りは棧瓦葺きとして、葺き材を異にしていた可能性を論じた²¹⁾。第二次においては外観写真からの判断となるが、屋根面の色調の違いが第一次と似ており(図16)、同様の葺き分けをしていたと推測する(図2、参照図20)。

4-2 関連記事

次に、第一次と第二次仮議事堂とを比較した記事を少々長いが引用する²²⁾(下線筆者)。

帝国議事堂は愈一昨廿日を以て内務省建築局より両院事務局へ引渡し済となりたるが今大日本建築会社の技師吉澤氏に就き新旧両議院構造の比較を聞得たるま、左に掲げんに総建坪は二千四百八十七坪にして之を旧院に比すれば六百坪を加へたり、昇降口は旧院は一ヶ所にして大に不便を感じしが今回は中央及び左右都て三ヶ所に設けたり、又今回の建築に於て最も意を致したるは防火壁なるが此防火壁は八十萬貫の鉄戸を以て造り中央と両院の境及び両院と其後部なる常任委員室の境並に常任委員室と会食堂の境に設置し万一の事ある時は直に此鉄戸を締切り如何なる猛火も其境を侵して燃入ることの出来ざる装置なりといふ、又旧院の部室は往々狹隘を感じたるに依り今回は建増して廿六坪とせり常任委員室も亦廿五坪に建増せり、又一見毫も旧体を存せざるものは議場なりその次第は旧院は抜天井にして幔幕を張りしも何分音響洩れ易く且暗黒にして不便少からざりしが今回は硝子の格天井となし三分の簾硝子を一面に吊したれば光線の映射は固より外観も亦極めて美なり加之ならず格子間も亦一分づ、透しあれば空氣の流通もよく如何に満員なりとも更に苦悩を感じることなしとのことなり、扨又点燈は旧院の割には燈台を場内に直下しありしが今回は千五百燭の電燈二台を硝子天井の裏面に設けたり、又旧院の卓子はその丈割合に高くして傍聴席より見下す時は頭ばかり并列せる如く甚だ見悪かりしが今回は八寸づ、を低め且つ後部へ毎段一尺五寸づ、を高めれば後席が前面の人に遮ぎらるゝ憂少しもし(略)さて議院建築上に於て最とも技師の技倆を現はすべきは音響の工合その宜しきを得るの如何に在るを以て此点に就きては古市土木局長及び監督技師吉井氏等も充分講究の上天井の高低より椅子の配置に至るまで皆学理上に基き定めたる由にて其旧院に勝るは勿論のことなり(略)、又傍聴席は両院共これを広め貴族院は四百九十二人、衆議院は五百四十二人を容れ得ることにせりと

以上から第二次仮議事堂では、規模の拡大、出入口の増設、各部室の拡張、防火壁、ガラスの格天井と天井裏への電燈の設置、議場内の空調、音響ならびに傍聴席からの視界の改善等が図られていることがわかる。以下、諸点について考察を加える。

4-3 比較考察

第二次仮議事堂の本館外壁の輪郭線に第一次のそれを重ねたのが図17である。第二次仮議事堂の間口方向は最長で約140mに対して、第一次のそれは約128mである。建坪（本館のみ）については、第二次は3267坪、第一次は1753坪である²³⁾。

第二次仮議事堂で規模を大きくした箇所は、建物背後の付属屋を除くと、貴衆両院議場前の玄関周り、建物両翼部の議長室周辺であり、建物西側の諸室はわずかに張り出しているに過ぎない。両者において個別の部屋割り、中庭の配置は異なるものの、重要な議場の大きさは同一で、特徴的な八角形の玄関ホール、その二股の階段の形状、同ホールから両議場へ通じる横長のホール、そして便殿の位置は不変である。

先に第二次仮議事堂の修繕工事において、議長席左右の支柱を撤去したことに触れた。そもそも第一次と第二次の議場とも同一規模であるにもかかわらず、建設当初の第二次の議場ひな壇に沿う桁行方向に、第一次より多くの支柱を入れたのは構造（耐震）補強にほかならない。修繕の結果、第二次の議場内は第一次のそれと酷似するものとなった（図10, 18）。双方の議場を見比べると、ひな壇の柱には一定間隔で段が付き、柱の上の水平材に線形が施され、柱間の壁に三角破風（ペディメント）が付くなど、その意匠は見紛うほど似ている。

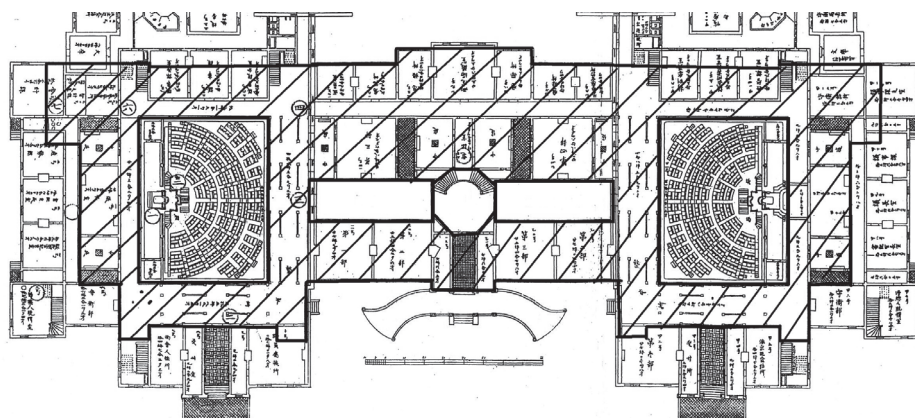


図17 第二次仮議事堂1階平面図（図5）に第一次の外壁輪郭線を重ねた図（一部加工）

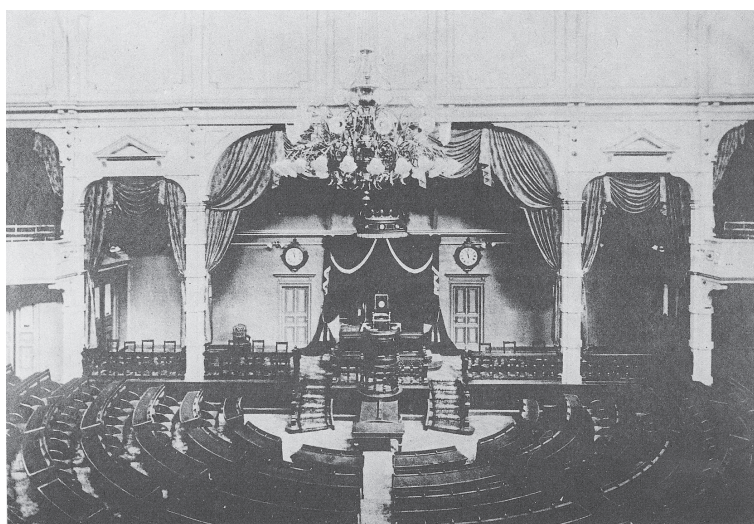


図18 第一次仮議事堂・貴族院議場

防火壁については、別の記事に「其構造は戸口々々の辺は特に厚さ二尺の煉火石の間に厚さ寸余の鋼鉄を二十貫目の鉄棒にして其運転を自由ならしめ万一火災の時は此鉄戸を閉鎖して焼失を防ぐなり（略）其構造も木造なるに防火壁を設けたる為百六十万の煉火石を用ひしと云ふ」²⁴⁾とある。

防火壁の箇所（図19の黒塗り部分）は、主として建物の中央部分と貴衆両院の議場とを大きく分割するように配置されるほか、本館から背後の建物に出入りする通路、会食室などに設置されている。なお、外観写真からは、防火壁が^{うだつ}卯立のように屋根から突き出ているのがわかる（図20の矢印）。

部屋の拡張については、例えば第一次の部室（第一局、第二局と呼称）は17.523から17.654坪、常任委員室は10.94から17.654坪であるのに対して、第二次の部室（第一部、第二部と呼称）は25.476から27.095坪、常任委員室は20.787から25.983坪であり、5割ほど大きくなっている。

天井裏には1500燭の電燈を2台設置したという。^{しよく}燭とは昭和23（1948）年以前に用いられていた光度単位で、東京電燈株式会社が明治23（1890）年4月に発行した「電気燈案内」によれば、「此電燈は八燭力より十燭力十六燭力（略）百燭力等段々の種別ありて大なるは千燭力以上のものあれども通常の室内用には多く八燭力より十六燭力二十燭力を用ひ」とある²⁵⁾。

通常の室内用は8から20燭ということから、1500燭の光度はある程度想像できる。その光が厚さ3分（約9mm）のガラス簾を通して議場内に拡散された。ただし、図21ではガラス天井の中央から電燈が吊り下げられ、次節で小屋組の復元考察に使用する図版（図22）にも同様に天井下に照明器具が描かれているので、ガラス天井を通過する光力が不十分だった可能性がある。

議場の床勾配については『復元と構想 歴史から未来へ』で、「第一次国会議事堂」の復元が試みられ、正面立面図、貴族院本会議場正面展開図、衆議院本会議場正面展開図が作成されている²⁶⁾。これらの図面に付随する大まかなスケール表示で

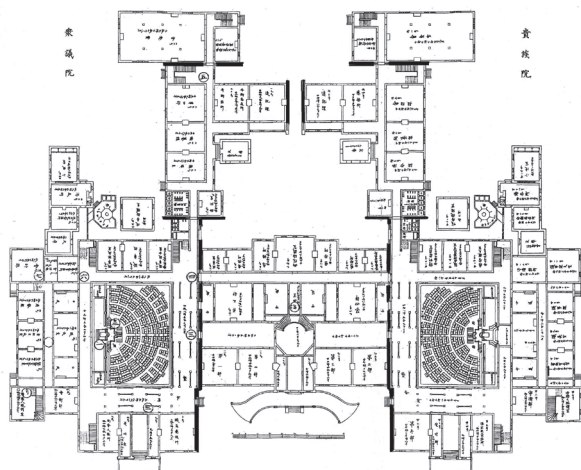


図19 防火壁の箇所（図5に黒塗り、一部加工）

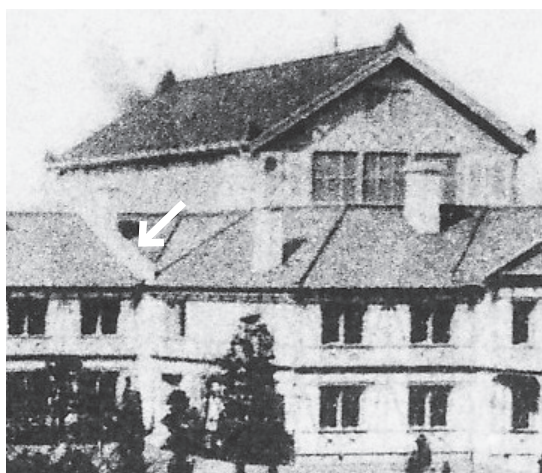


図20 第二次仮議事堂外観（図2を拡大：矢印の先が防火壁）

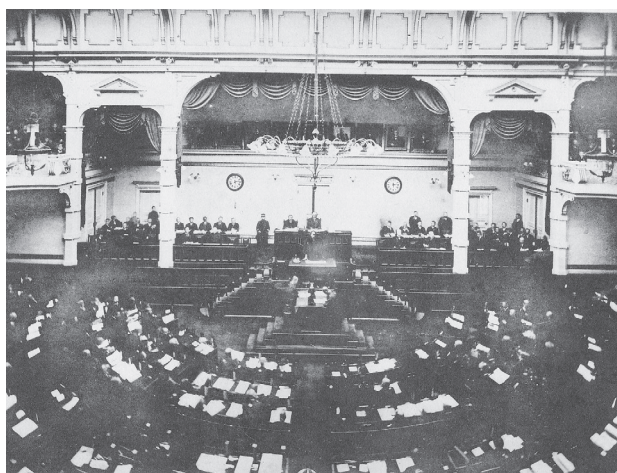


図21 第二次仮議事堂・衆議院議場

の概算となるが、第一次の議場の床勾配は約1寸勾配(1/10)である。第二次については、『世界の議事堂』に掲載された議場の勾配を示す図版(図23)から、約2.2寸勾配(2.2/10)で、第一次の約2倍の傾斜がある。

議場内の音響については、第1回帝国議会開催中の明治23(1890)年12月12日付の新聞が次のように報じている²⁷⁾。

「帝国議会議事堂は其末席即ち議長席より前面斜めに左右突当りの場は発言者の音声槌に聞得ざる事ある」というので、造家学会(現日本建築学会)で協議することとなり、工事担当者のほか、「片山東熊、辰野金吾の諸氏等八十余名集会して種々協議」し、その際、議場が劇場と似た状態にあることから、歌舞伎座の音声の試験をすることになったという。

同記事から、第一次において音響の問題が早くも提起されていたことになる。

最後の傍聴席については、参考までに第一次仮議事堂の「傍聴席は議場の階上三方に設けたる三段の棧敷にして貴族院に在りては三百三十八人、衆議院にありては四百三十二人に供すべき椅子を配置し」との記事がある²⁸⁾。第二次において、貴衆両院とも傍聴者数を増やしている。

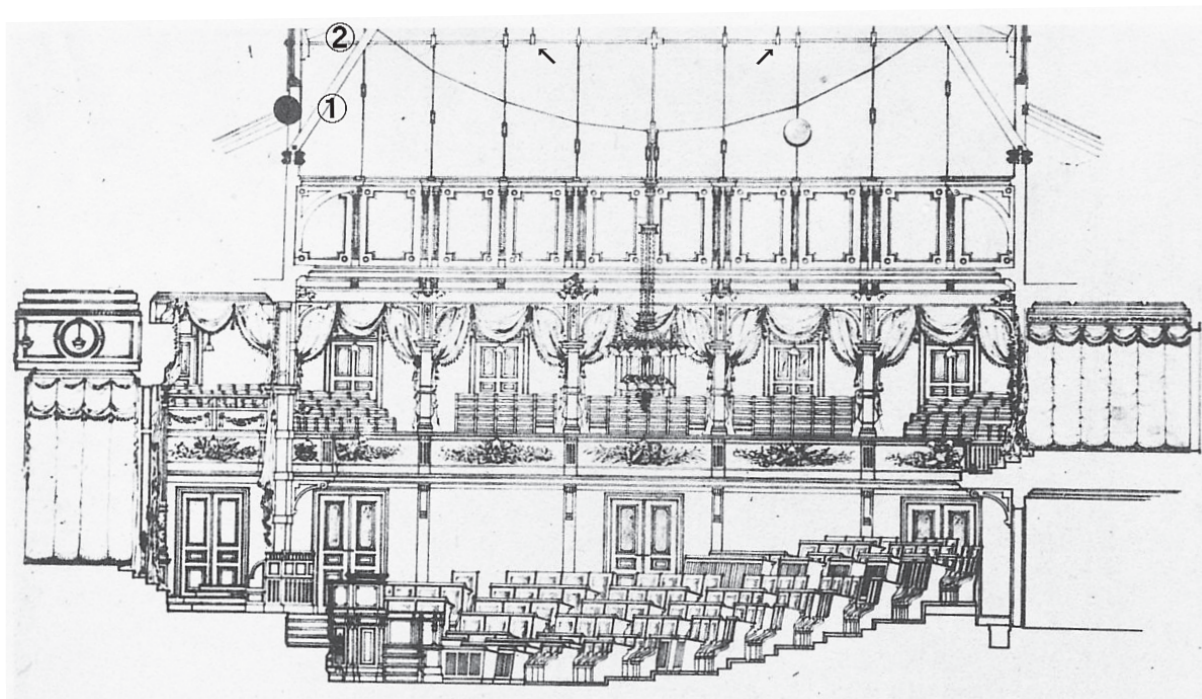


図22 第二次仮議事堂・貴族院議場の断面図

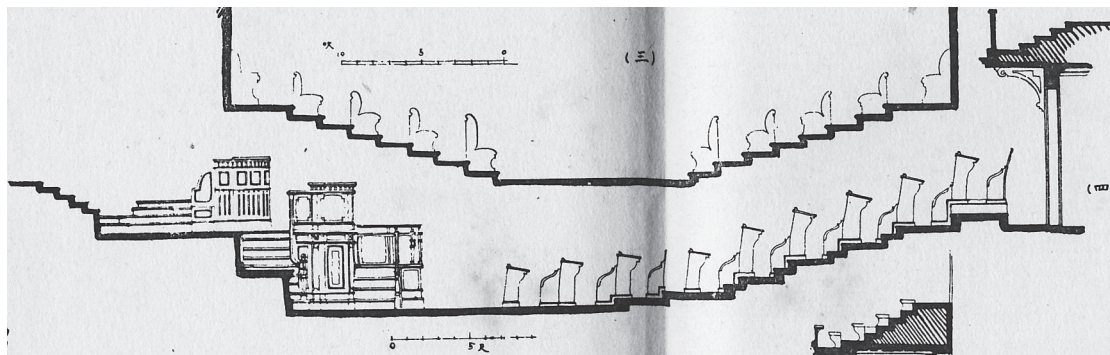


図23 第二次仮議事堂・議場の床勾配(図の下段): なお、図の上段は英国下院議場

ここまで新聞の掲載記事の内容に検討を加えてきたが、それ以外の基礎工事に関する記事があったので、以下に引用する。

前議事堂（第一次のこと＝筆者註）の地固めは稍十分ならざるところありて打杭の如きも二尺内外のものを用ひたりしより建築後間もなく屋舎の傾斜を来したるに付き今回（第二次のこと＝筆者註）は右の前例に鑑み五尺の杭を打込むこととし²⁹⁾

同基礎工事について、第一次仮議事堂関連記事を探してみると、以下の記載が見出せた。

内幸町に建築中の国会仮議事堂は工事中俄に建物傾きければ一時工事を中止して地盤を修理し居たるが一兩日前より再び建築に取懸れり³⁰⁾

第一次仮議事堂においてこの事態にどのような応急処置をしたのかは不明であるが、第二次では当初から杭の長さ自体を変え、第一次以上の安全対策を図っている。

5. 議場小屋組の復元考察

第二次仮議事堂の議場においては、議長席の左右にあった支柱を撤去してひな壇周りを改修しているが、小屋組は改変されていない。そこで小屋組の考察に、竣工時の議場正面を撮影した写真（図24）、平面図（図5）、そして関連文献ならびに新聞記事のほかに、改修後の断面図（図22）を使用する。

まず屋根の傾斜は、写真（図24）から割り出すと約6.3寸勾配（6.3/10）である。次に議場の梁間については、『世界の議事堂』に「長方形議場の割合其容積の比較」の表があり、第二次仮議事堂議場の高さ、幅（桁行）、そして長さ（梁間）の比を、1：2.98：2.25とする³¹⁾。この比率から桁行と梁間の比は1.32：1となり、平面図に記載された議場坪数（142.205坪）に一致するように計算すると、梁間は62.28尺（18.87m）、桁行は82.20尺（24.91m）となる。

図22は貴族院議場の梁間方向の断面図である。ガラス天井までの展開図は詳細に描かれているが、同天井から上の小屋裏は一部のみが知れる程度である。

ガラス天井から上に、議場側壁の柱と接合した斜めの部材が2本ある（図22の①と②）。そのうちの①は柱との接合部に黒点が打ってあるので、柱とはボルト締めで緊結され、木材は二つ割りであることがわかる。部材②はその一部のみであるが、同部材と柱の間に添え木を挟んでいる。この添え木には同議場の梁間を鉄棒で繋ぐタイバー（屋根荷重により壁が傾くのを防ぐ目的で梁間方向に挿入される鉄

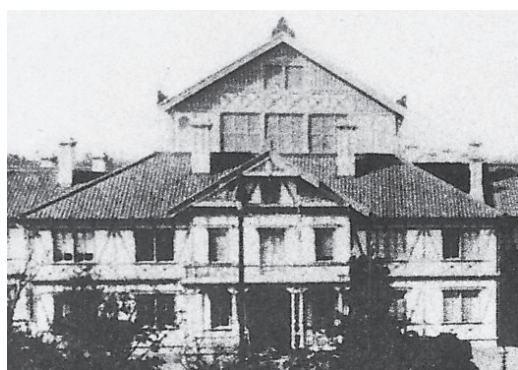


図24 第二次仮議事堂・衆議院議場付近の外観
（図2を拡大）

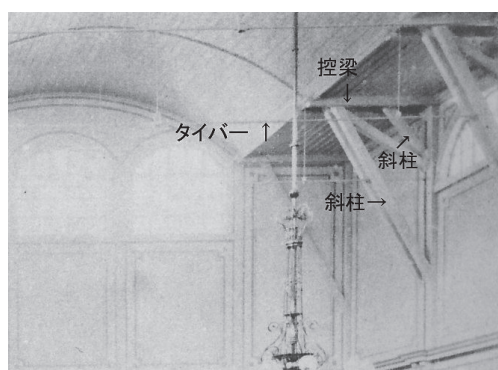


図25 第一次仮議事堂・貴族院議場天井付近
の写真（部分）

棒のこと)が貫通し、それは部材①の隙間を通っていることがわかる。なお、このタイバーには、ガラス天井を吊っている計9本の鉄棒が接合している。

これら2本の斜材を第一次仮議事堂の同箇所の写真(図25)と比較すると、斜柱と支柱の接合の仕方とその立ち上がる角度が似ている。第一次仮議事堂はシュテークミュラーが設計し、第二次は同じドイツ人チーツェが関与している。筆者は第一次仮議事堂の小屋組をいわゆる「ドイツ小屋」の技法から復元したので、第二次についても同様の技法を応用してみる。その際の条件は以下の通りである³²⁾。

- ・ドイツ小屋とは母屋組の一種で、棟木、母屋等で合掌を支持して、束、斜柱、^{おびはり}帯梁、^{ひかえはり}控梁、方杖を組合わせて構成され、とくに帯梁と控梁は合せ梁とし、合せ梁と他の部材との接合点はボルト締めされる(図26)。
- ・棟木から鼻母屋(軒桁)までの垂木(合掌)の長さが4.5m以上の場合は、母屋が必要で、母屋と鼻母屋(軒桁)、母屋と垂木(合掌)の長さはそれぞれ4.5mを最大値とする。

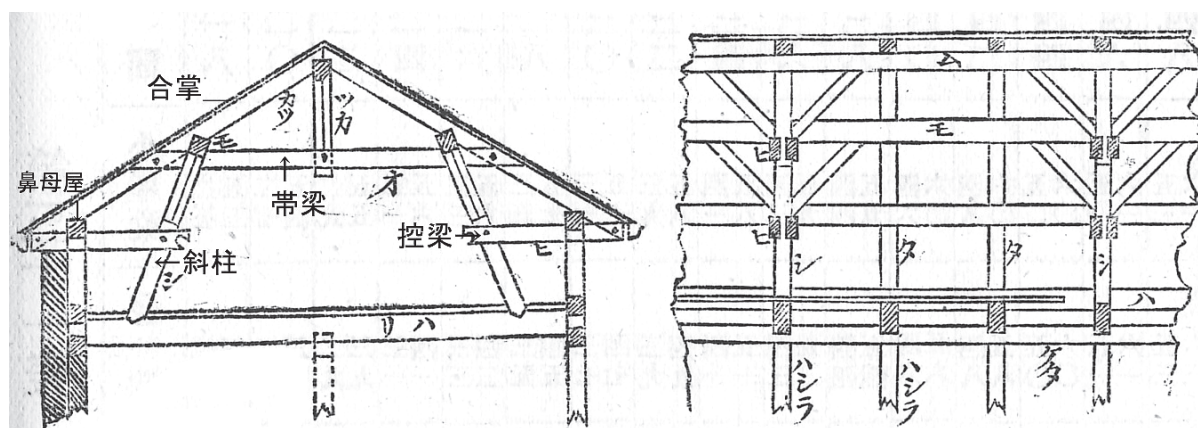


図26 ドイツ小屋の図解

以下、議場小屋組の復元考察をしていくが、その前に関連する新聞記事を紹介する(下線筆者)。

天井も演説者音声の反響を防止する為に旧議場より六尺下に議場の日光を引きて透明ならしむるに天井の中央に六尺四方の硝子窓を設けたり此硝子は先に独逸国へ注文せしを以て此程漸く到着したるものにて其質透明堅固にして頗る美麗也³³⁾

天井の明り取も旧議事堂は屋根裏へ附着しありしより声音の反射甚だ面白からざりしが今回は右の前例に懲り天井下数尺を下りし所へ鉄棒を以て六尺四方の硝子窓を釣下げる仕組となしあれば今後は声音も益々遠距離に達することならん³⁴⁾

ここで言う「旧議場より六尺下」あるいは「天井下数尺」は同じ表現であるが、旧議場の天井とはどこを指しているのか。第一次の議場は平天井ではなく、曲面天井であった。そこで、旧議場両側壁の控梁が造る天井を基準に(図25)、そこから6尺(数尺)下に鉄棒(タイバー)を挿入したというのが筆者の解釈である。

では、議場の梁間を62.28尺(18.87m)、屋根の傾斜を6.3寸勾配として復元を試みるが、一つ留意すべき点がある。それは議場の梁間とその上に架かる小屋組の梁間が一致していないことである。議場の梁間はひな壇を含んで算出したものであるのに対して、小屋組の方は議場桁行方向の議長席の

左右に並ぶ柱までを梁間としているからである。そこで小屋組の梁間を平面図（図5）から求めると、約 51.5 尺（約 15.6 m）となる。

このような前提で、第一次仮議事堂（図 25）に倣って図 22 に記した部材②の上に新たに部材（斜柱）を追加する。その斜柱を部材①と同じ角度で延長して合掌との接点に母屋を置く。結果的に合掌は 2 ヲ所の母屋で支持され、母屋間は約 3.0～3.5 m となり、ドイツ小屋の条件である 4.5 m 以下に収まる。

次に棟束ならびにその束を受ける梁が必要である。その場合、採光を妨げないように、外観妻側の窓（図 24）と小屋組の構成部材との取り合わせを考えなければならない。棟木近くの母屋の下端に二つ割りの帯梁を配して、合掌ならびに棟束を挟んでみると、妻側上部の窓楣^{まぐさ}の位置にこの帯梁が入り、採光に影響しないことがわかった。また側壁から出る斜柱を水平方向で挟む控梁は、妻側下方の 3 連窓の楣とほぼ同じ位置に来る。

ところで、ガラス天井はタイバーに接合する計 9 本の鉄棒で支持されているが、そのままではタイバーは下にたわむ。図 22 にはこのタイバーをほぼ 3 等分する 2 ヲ所に接合金具（図中の矢印）が見えるので、この 2 ヲ所で上からタイバーを吊っていたと考えられる。

以上の考察に基づいて作図したのが図 27 である。

次に議場の高さを求めてみる。先に第二次仮議事堂議場の高さ、幅（桁行 24.91 m）、そして長さ（梁間）の比を、1：2.98：2.25 と紹介した。この比率によれば議場床からの天井高は 8.36 m となる。念のため、図 22 で同様に床からの天井高を求めてみる。同図における議場の高さ（梁間 18.87 m）の比は約 1：1.7 であり、そこから天井高は約 11.1 m となる。書籍に掲載された図面（図 22）には精度の問題はあろうが、天井高が 8.36 m と約 11.1 m では違い過ぎる。

この天井高の違いを、屋根勾配を算出するために使用した図 24 で再度検討してみる。同図でも正確な数値は期待できないが、1 階の土台の上（床）辺りから棟までは約 21～22 m である。また、図 27 におけるガラス天井からの棟高を求めると約 10.0 m で、議場床からの棟高は、11.1 m を加えて約 21.1 m となり、外観で求めた数値に近い。

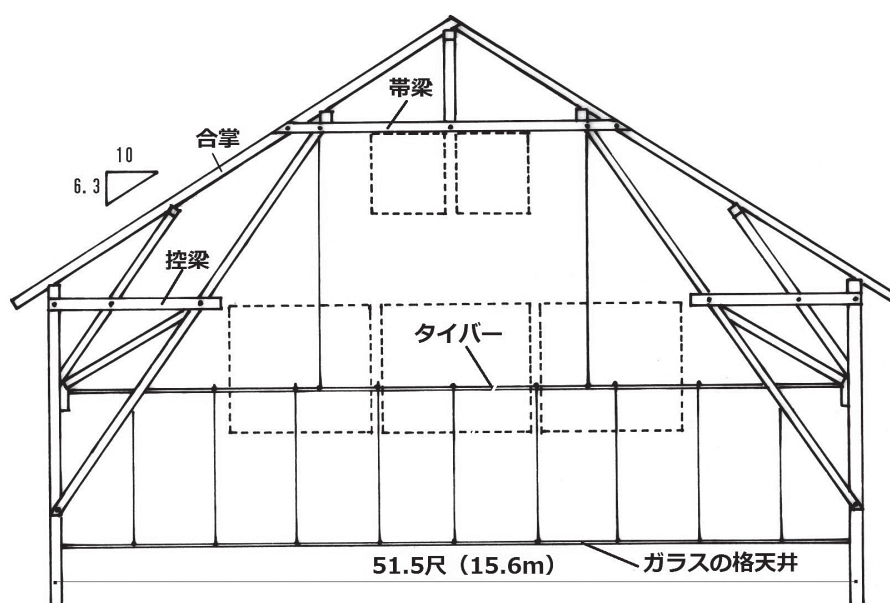


図 27 第二次仮議事堂・議場小屋組の架構図：破線で囲んだところは窓

これらはいずれも参考値であるが、議場の比率 1 : 2.98 : 2.25 を図面ならびに写真と照合した結果、幅と長さの比率は図面と一致するものの、高さと同様に高さとの比率は適合しない。

なお、小屋組の間隔は平面図の柱配置から議場桁行 (82.20 尺) を 7 分割して、11.74 尺 (3.56 m) となる。

因みに、『復元と構想 歴史から未来へ』に掲載の第一次仮議事堂の貴族院本会議場正面展開図からは、議場の床から曲面天井の頂部までの高さは約 17.4 m (床から曲面天井の迫元までの高さは約 15.4 m) である³⁵⁾。第二次の天井高 (約 11.1 m) は音響ならびに照明への配慮から、第一次に比べてかなり低く抑えられていたのである。

結 論

以上の考察を通じて、第二次仮議事堂については次のようにまとめることができる。

- ・第二次仮議事堂の設計者名は文献によって異なるが、内務技師吉井茂則、ドイツ人建築技官オットカー・チーツェ以外に、妻木頼黄が参画していた可能性が十分にある。
- ・第二次仮議事堂においては、第一次が竣工後 2 ヶ月足らずで焼失したため、議事堂としての実績を多く積むことなくその設計を進めざるを得なかったが、中でも防火壁の設置は、この教訓を踏まえた優先事項であった。
- ・第二次仮議事堂の小屋組を、第一次と同じドイツ小屋の技法で復元することができた。小屋組がそのまま継承されたのは、双方ともドイツ人建築家が関与し、同一規模で経験済みであったこと、採光用に小屋裏が広く取れたことが理由となろう。
- ・竣工した第一次仮議事堂には中央部に塔はなかったが、その設計段階では塔の設置は予定されていた。第二次仮議事堂においてそれが現実のものとなった。
- ・第二次仮議事堂の正面側に突出する計 5 つの屋根と塔屋、3 つの玄関口の上部を飾る切妻破風と張り出した車寄せ、適度に修飾された妻側は、第一次仮議事堂にはない華やぎと変化を建物に与えている。また真壁造りの壁面に配された構造軸組を兼ねた斜材は、白漆喰の壁によく映えたことであろう。
- ・第二次仮議事堂は第一次より規模を大きくしたが、議事堂空間の基幹をなす八角形の玄関ホール、その左右の横長のホール、さらにその先に控える議場の位置と規模は同一であり、2 階奥の便殿の位置、議席を扇形に並べ、議席に対面して段差のあるひな壇を設ける形式も不変である。
- ・第二次仮議事堂は大正 14 (1925) 年 9 月の修繕工事中の失火で焼失しなければ第三次仮議事堂は必要なく、昭和 11 (1936) 年竣工の現在の国会議事堂にバトンタッチしたことであろう。それだけ議事堂としての需要に应运ってきたと言える。そこでは、第一次の曲面天井から音響と照明を配慮したガラスの格天井への転換、必要諸室の拡大、議席の床勾配を大きくすることによる視界の改善など様々な展開がなされていた。
- ・第二次仮議事堂の修繕工事は 3 年度にわたり、その工事範囲は本館背後の建物では建坪の 5 分の 1、本館では 10 分の 7 に及んだ。それだけ大規模な工事を行ったのは、国会議事堂の竣工が昭和 11 (1936) 年まで延び、第二次を延命させる必要があったからだ。

註

引用については原則として原文のままとしたが、漢字は概ね新字体を用い、変体仮名は通行の仮名に改め、句読点は適宜補い、読解を助けるルビは残している。

- 1) 堀内正昭：『ブックレット近代文化研究叢書 10 初代国会仮議事堂を復元する』，昭和女子大学 近代文化研究所発行，2014
堀内正昭：「広島臨時仮議事堂（竣工 1894 年）における議場小屋組の構法について」，学苑・環境デザイン学科紀要 No.873 昭和女子大学 近代文化研究所発行，2013.7 pp.32-42
堀内正昭：「広島臨時仮議事堂の平面計画ならびに議場小屋組について」，『妻木頼黄の都市と建築』所収，日本建築学会発行，2014，pp.76-97
- 2) 歴代の仮議事堂の呼称は，例えば『帝国議会議事堂建築報告書』では第一回，第二回，第三回とし，『目で見る議会政治百年史』では第一次，第二次，第三次とする。本稿での呼称は後者とする。これらの文献の詳細は 3) を参照のこと。
- 3) 仮議事堂の沿革については，次の文献を参照。
宮繕管財局編纂：『帝国議会議事堂建築報告書』（非売品），昭和 13 年
衆議院 参議院編集：『議会制度百年史一別冊一目で見る議会政治百年史』，大蔵省印刷局発行，1990
- 4) 広島市文化財団広島城編集：『企画展 日清戦争と広島城』，広島市市民局文化スポーツ部文化財課発行，2011（初版 2009），p.50
- 5) 先行研究に，山崎鯛介：「第二回仮議事堂の建物の特徴」，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999.7 pp.411-412
第二次仮議事堂を意匠，間取り，音響の観点から分析し，第一次仮議事堂との比較を行っているが，紙数の関係から十分な考察に至っていない。
- 6) 『帝国議会議事堂建築報告書』（前掲書），p.3
- 7) 『大蔵省臨時建築部年報 第一』，大蔵省臨時建築部発行，1909
『大蔵省臨時建築部年報 第二』，大蔵省臨時建築部発行，1910
- 8) 『大蔵省臨時建築部年報 第一』（前掲書），p.201
- 9) 『大蔵省臨時建築部年報 第二』（前掲書），p.134
- 10) 『目で見る議会政治百年史』（前掲書）によれば，図8のキャプションには「明治37・3 イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」とある。
- 11) 「議事堂修築工事完成」（東京朝日新聞 1907 年 12 月 21 日付）
- 12) 大熊喜邦：『世界の議事堂』，洪洋社，1918，p.61
- 13) 『大蔵省臨時建築部年報 第二』（前掲書），pp.590-591
- 14) 『帝国議会議事堂建築報告書』（前掲書），p.2
- 15) 『ブックレット近代文化研究叢書 10 初代国会仮議事堂を復元する』（前掲書），pp.18-24
- 16) 堀内正昭：「来日ドイツ人建築技官オットカー・チーツェの経歴と建築作品」，日本建築学会大会学術講演梗概集（九州），2007.7 pp.397-398
- 17) 「新築議事堂」（東京日日新聞 1891 年 2 月 17 日付）
- 18) 『世界の議事堂』（前掲書），p.90
- 19) 大熊喜邦については，博物館明治村編集：『特別展 明治建築をつくった人々 その二』，名古屋鉄道発行，1986，p.43
- 20) 妻木頼黄の経歴については以下の文献を参照。
博物館明治村編集：『明治建築をつくった人々 その四 妻木頼黄と臨時建築局一国会議事堂への系譜』，名古屋鉄道発行，1990
長谷川堯：『日本の建築 [明治大正昭和] 4 議事堂への系譜』，三省堂，1981，pp.113-184
- 21) 『初代国会仮議事堂を復元する』（前掲書），pp.58-65

- 22) 「両議院新旧構造の比較」, (東京朝日新聞 1891 年 10 月 22 日付)
- 23) 仮議事堂の建坪は文献によって様々である。ここでは『世界の議事堂』(前掲書, p.13, p.90)を参照。
- 24) 「新築議事堂と旧議事堂の差異」, (読売新聞 1891 年 8 月 23 日付)
- 25) 東京電燈編集発行:『東京電燈株式会社開業五十年史』, 1936, p.39
- 26) 大林組編著:『復元と構想 歴史から未来へ』, 東京書籍, 1986, pp.132-141
- 27) 「議事堂の音声」(東京朝日新聞 1890 年 12 月 12 日付)
- 28) 「議會仮議事堂」(東京朝日新聞 1890 年 3 月 9 日付)
なお、『世界の議事堂』(前掲書, p.68)には、第二次仮議事堂の傍聴席は、貴族院 565 人、衆議院 718 人との記載がある。
- 29) 「議會議事堂建築の模様」, (東京朝日新聞 1891 年 5 月 7 日付)
- 30) 「国会仮議事堂」(東京日日新聞 1889 年 4 月 25 日付)
- 31) 『世界の議事堂』(前掲書), p.33
なお同書では、議場の幅 83.3 尺、奥行 63.0 尺、面積 141.7 坪とする (p.30)。この面積は平面図に記載された数字と異なり、この幅と奥行で再計算すると議場は 145.78 坪となり、一致しないため、本稿では、幅と奥行の比率を優先して 142.205 坪になる数値を用いる。
- 32) ドイツ小屋について詳しくは以下の文献を参照。
堀内正昭:「ドイツの母屋組屋根から見たわが国のドイツ小屋に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集 第 542 号, 2001.4 pp.221-227
- 33) 註 24) に同じ
- 34) 「議事堂工事の模様」(東京朝日新聞 1891 年 8 月 19 日付)
- 35) 註 26) に同じ, p.140

図版出典

- 図 1 地図資料編纂会編集:『日本近代都市変遷地図集成 5 千分 1 江戸ー東京市街地図集成 II 1887-1959』, 柏書房, 1990
- 図 2, 10, 18, 20, 24, 25 『帝国議會議事堂建築報告書』(前掲書)
- 図 3 『帝国議會仮議事堂建築記念』(非売品), 光明社, 1925
- 図 4, 7, 12, 13, 21~23 『世界の議事堂』(前掲書)
- 図 5, 6, 11, 14, 17, 19 衆議院憲政記念館所蔵(資料名 帝国議會議事堂之図)
- 図 8, 9 『目で見る議會政治百年史』(前掲書)
- 図 15 建築学会編:『明治大正建築写真聚覧』, 1936
- 図 16 日本建築士会編:「日本建築士」, 第 20 巻 第 1 号, 1937 年 1 月
- 図 26 滝大吉:『建築学講義録 卷之二』, 建築書院, 1896
- 図 27 筆者作図

(ほりうち まさあき 環境デザイン学科教授・近代文化研究所所員教授)